

《インタビュー記録》

歴史教育体験を聞く

武井正教先生

日時：2007年8月31日

場所：東京都国立市

聞き手：鈴木正弘・茨木智志

はじめに

「歴史教育体験を聞く」の目的は、歴史教育に携わってきた先生がたの歴史教育の体験、すなわち自分が受けてきた歴史教育、そして自分が行なってきた歴史教育の話を軸として、さまざまな経験や思いをインタビューの形で聞き取り、その記録を活字にすることで、歴史教師の共有の財産とすることにある。

武井正教（たけい まさのり）先生は、1922年1月15日のお生まれで山梨県の出身である。学籍にありながら1941年から教壇に立ち、翌年、後に東京都立新宿高校となる旧制中学校に移って、戦後は特に世界史を担当された。1957年からは予備校でも世界史を教え、非常に多くの受講生の支持を集めた。

武井先生には2007年にお話を伺う機会を得た。しかし、その後、編集者の不手際により聞き取りの継続も記録の刊行もできないでいたところ、まことに残念ながら武井先生は2016年4月26日に逝去された。聞き得たお話は武井先生の活動のすべてを網羅できておらず、しかもインタビュー記録に不可欠なご本人の確認もかなわない状況ではあるが、そのことを明記した上でご家族のお許しを頂いて記録として刊行すべきであると判断した。

以下は、武井先生のインタビューの記録である。

1. 中学校から大学へ

— 本日は、よろしくお願ひいたします。はじめに、大学に進学された前後のことからお聞かせ下さい。

私が山梨県立甲府中学校（旧制）¹に入りましたのが、昭和10（1935）年4月です。昭和14（1939）年に、父親の転勤した関係で、身延^{みのぶ}中学校（旧制）²に転校し、翌年の昭和15（1940）年に卒業いたしました。卒業後、実は、私は医学に行きたかったのです

¹ 山梨県立甲府中学校（旧制）：現在の山梨県立甲府第一高等学校（山梨県甲府市）。

² 山梨県立身延中学校（旧制）：現在の山梨県立身延高等学校（山梨県南巨摩郡身延町）。

が、父親がなかなか頑固な人でして、立正大学を勧められました。そこで、はじめは立正大学（旧制）の高等師範部の歴史地理学科に入学しました³。当時、立正大学の地理学には、東京文理科大学⁴の田中啓爾⁵さんという立派な先生がおられました。立正大学の先生がたは、地理学は東京高等師範学校系で、歴史学は東京帝国大学系ですね。歴史では、たとえば辻善之助⁶さんがおられました。たいへん魅力的でした。

昭和 17（1942）年 9 月に高等師範部を卒業して⁷、もちろん教員免許状をいただきました。その後、大学の教授会の推薦で大学に残れということになりまして、文学部の史学科に入りました。戦時特例法というのがありまして、教授会の推薦を得られますと、自分が属している大学に限らず、日本のどこの大学に入学してもよかったです。けれども、やはり大学への義理もありましたから、私は他の大学には動きませんで、立正大学におりました。

— 中学校のときに印象に残っている授業はございますか。

甲府中学のときの西洋史の授業に感銘を受けました。寺沢玄宗という禅宗のお坊さんだった先生でね。最後は身延中学の校長もなさいました。背景を非常に注意して教えてくれました。結果だけではなく、どうしてそうなるのかという経過とか、歴史的な背景とか、非常に的確におつかみになる。あの授業は私に大きな影響を与えたと思いますよ。

愛知県のご出身の方でしたが、後に、私が夏期講習で名古屋に行きましたときに、奇しくも寺沢先生のお孫さんが、私の講義を聴いていて、そのテキストを家に持って帰った。「ちょっと見せてごらん。あ、これは武井君じゃないか」ということで、さっそく電話がかかってきた。「忙しいだろうが、ちょっと足を運びなさい」と。初めて先生の寺に通されて、色々な話をしました。先生もよく覚えていて下さったと思います。お話しした際に、「武井君、私は、実はこういう書物を書いたかったんだよ」とおっしゃられた⁸。その後になって、できたら私の書物の中に、先生のお名前をお入れして、感謝を申し上げようと考えていましたが、お亡くなりになりましたので。そういう先生にお会いできたことは大変、幸運だったと思います。私には何か格別な存在に感じられます。寺沢先生の影響は受けましたね。

— 中学校卒業後に、高等師範部の地理歴史学科に進まれた理由は何でしょうか。また、

³ 旧学制下の多くの私立大学においては、3年制の専門部高等師範科もしくは高等師範部を設置して中等学校教員養成を行っていた。

⁴ 東京高等師範学校・東京文理科大学は、戦後に東京教育大学となり、現在は筑波大学となっている（茨城県つくば市など）。

⁵ 田中啓爾：1885～1975年、地理学。

⁶ 辻善之助：1877～1955年、歴史学。

⁷ 本来は1943年3月卒業であったが、戦時短縮により1942年9月卒業となった。

⁸ 寺沢玄宗には、1938年刊行の寺沢玄宗編、内藤智秀校閲『新教授要目準拠 世界歴史図表 附・国史重要年表』（三省堂）の著作がある。

お若いときにお書きになったものを拝見すると地理に関するものが多いように思いますが、このときは地理がご専門だったのでしょうか。

地理歴史学科に進学したのは、やっぱり好きだったんでしょう。専門としては、歴史でしょうね。地理歴史学科の中では、特別に地理と歴史に分かれることはありませんでしたけれども、やっぱり地理には哲学がありませんからね。ですから、どうしても歴史に深みを感じました。それで、高等師範部の地理歴史学科を卒業して、文学部の史学科に進んだのです。

—（鈴木）当時の立正大学の史学科では、日本史が中心であったと思いますか。

そうですね。しかし、東洋史・西洋史にもユニークな先生がいらっしゃいましたよ。東洋史では有高巖⁹さん、西洋史では岡本峻¹⁰さんがおられました。

私が史学科で書いた論文は、辻善之助さんの他にも、明治維新研究の大家であった伊野部茂雄¹¹さんや、哲学では樺俊雄¹²さん——樺美智子¹³さんのお父さんです——、それらの先生方が連関してご覧になって、ご感想を頂いたり、ご指導を頂いたりしました。良い先生方がそろっていましたね。色々なことにずいぶん大勢のかたが力を貸してくれました。ありがたいことだと思いました。

— その史学科での卒業論文についてお聞かせ下さい。

私の論文「課題的生の時間的行為体系としての歴史に於ける天皇の研究¹⁴」は、詔勅の中から天皇に関する言葉の使い方とかを全部、追求しまして、それをまとめたものです。当時、四谷にお住まいだった辻善之助さんは私の論文に関心をもたれて、お宅によく呼ばれました。ずっと読んでおられて、「武井君、この部分は後世のものだよ」と注意して下さいました。偉い人でしたね。

実は、論文はこれです（以下、論文を前にしてのお話）。当時、大学に提出して、私の所には別に原稿があったはずなんですけれど、無くなっちゃいました。ところが、ある日、立正大学で講義していたところ¹⁵、「武井君の書いたものが大学の金庫にあるよ」と聞き、ちょっと見せて下さいというと、金庫が開けっ放しなわけ。「ちょっと借りま

⁹ 有高巖：1884～1968年、東洋史専攻。

¹⁰ 岡本峻：1954年没、西洋史専攻。

¹¹ 伊野部茂雄：1877～1954年、日本史専攻。

¹² 樺俊雄：1904～1980年、哲学・社会学専攻。

¹³ 樺美智子：1937～1960年、東京大学在学中に1960年の安保闘争に参加し、デモ隊の国会突入時に警官隊と衝突して死亡した。

¹⁴ 本論文には「昭和17年着手」「昭和22年11月10日脱稿」と記されている。なお、本論文は文部省人文科学部門研究奨励論文として1948年5月に奨励金を受賞している。

¹⁵ 武井氏は1971年から1991まで立正大学文学部講師に招聘されて兼任している。

すよ」と家に持ってきちゃったんです。その内に返すつもりだったんですけど（笑）。

—（茨木）武井先生は世界史の先生というイメージでしたが、これを拝見しますと、純然たる日本史ですね。

日本史というより、日本哲学ですね。

2. 軍隊からの即日帰郷

— 武井先生の学生時代は戦争の時期に当たりますが、先生ご自身は戦争とどのように関わられたのでしょうか。

私は雨の中の神宮外苑で学徒出陣の行進をした一人です¹⁶。当時、すでに覚悟はしておりました。そして、その年に、そのまま召集されました。

そんなことで参りましたところ、不思議だと思ふことがたくさんあったんですよ。徴兵検査がありました。大変わずらわしい、厳しい検査でしたけれど、軍医は私の体に触れないんですよ。「おかしいなあ」と思いました。変な意味ではないですが、他の人はもう大変ですよ。体中を調べられて、なかには、ずいぶん殴られた人もいました。

とにかく召集令状が来ましたから、連隊に入りました。入隊しますと、その日から、みんな任務につくのですけれど、私の名前を呼ばないんです。私だけ任務がないわけです。「どういうわけでしょうか」と尋ねると、上官は「私にも分からない。上からは何も言われていない」とのことでした。ここでも「おかしいなあ」と思っておりました。その日、練兵場に集合するようにとの指示がありました。連隊のすぐ横が、練兵場でした。集合して、隊列を組んで、いよいよ連隊の門をくぐろうとしました時に、伝令が飛んできて、「武井、おるか」というわけです。たくさんの方がいるわけですから、武井など他にもいるだろうと思っていると、「官・姓名を名乗れ」と言われたものですから、私の階級と名前を告げました。そうしたら、「列外に出ろ」と言うんですね。連隊の門の一步手前です。

後で聞きましたら、どのような場合でも、その隊列が門を過ぎると、連隊長の命令は無効なんだそうです。ですから、一步手前でくい止められたのです。そして「本隊に戻れ」「私服に着がえろ」と。留守部隊長に——たしか中佐だと思いましたが——、「私も参りとうございます」と言ったのですが、「お前には、上からの命令で、任務が別にあるから、すぐに衣服を取り返してこい」と言われました。私の私服を持って帰った使いの者はすでに連隊を出ており、かなり先まで行っているはずでした。しかたないので、下士官が付いてくれて、取りに行くんです。ところが、下士官より私のほうが足が速いものだから、街の中で「武井、待てよ」というんです。なんだか私が脱走兵みた

¹⁶ 東京の「出陣学徒壮行会」は、明治神宮外苑競技場で1943年10月21日に行なわれた。雨の中の行進の映像が残されている。

いなことで、本当に具合が悪かった。それでも衣服をなんとか取り返してきました。すると留守部隊長から「ただちに帰ってよらしい」と言われました。

— そうしますと、武井先生が軍隊に入られていた期間は、どれくらいになりますか。

一日ですよ。だから、私の場合は「即日帰郷」ですね。即日帰郷というものがあるということは聞いたことがあります、私の場合以外は、実例として聞いたことはありません。

他の人たちは、召集されて、その日に軍服に着替えて、練兵場に行って、そのまま満州（現在の中国東北部）に行きました。私もあのまま行っていますと、満州の浅川隊という部隊——機関銃といいますか、機関砲といいますか——で、たぶん戦死していたでしょう。もし、そこで生き残ったとしても、バタン半島（フィリピン）にまわされた。あの部隊は全滅したはずですよ。ところが私だけ、そういうわけで生き残って帰ってきました。私も不思議に思うし、まわりの者も不思議だと言います。おそらく私だけではないでしょうか。

— どのような理由があったのでしょうか。

思い当たることはないかという、ないわけではないんです。たとえば、あの頃、旧制中学校では、連隊から配属将校が配属される。その配属将校が留守のとき、陸軍から誰かが中学校に来ましてね。結局、若い教員だった私が全体の指揮を執ったんですよ。それが終わりますと、校長をはじめとして、軍隊のお偉いかたを料理屋に呼んでご馳走するわけです。そのとき、連隊から来た者から「あの青年を呼びなさい」と言われて…。まさか、そのくらいのことでもって、あの大戦争から抜けるなんてことは考えられない。今でも考えられない。だけれども、そんなわけでございまして、以来、学校に戻りまして、ずっと教員を続けておりました。

— 武井先生の同級の皆さんも同じく学徒出陣で行かれたのですか。

そうですね。ずいぶん亡くなっておりますね。

3. 興国中学・府立六中・都立新宿高校

— 即日帰郷で戻られて教員を続けられたというお話ですが、履歴を拝見すると、高等師範部地理歴史学科と文学部史学科に在籍されている間に、武井先生は教職に就かれています。この間の経緯をお聞かせ下さい。

昭和 16 (1941) 年 8 月から私立の豊南商業学校¹⁷の講師を 1 年間いたしました。早稲田大学の哲学の教授からのご指名でした。昭和 17 (1942) 年の 9 月に東京府立興国中学校の嘱託をしまして、翌年の昭和 18 (1943) 年 10 月に正式に教諭になりました。嘱託と教諭とでは、仕事の内容は変わりませんが、ただ、教諭になると色々な面で責任を負わされ、拘束されることが異なるだけです。

興国中学校は、夜間の中学校です。関東大震災 (1923 年) の際に、経済的に凋落した家庭が大変に多く、「かわいそうだ。優秀な人材を救済しなければならない」ということからできた学校です。その後になって、六中 (東京都立第六中学校、現・新宿高校¹⁸) 第二部となりました。この「興国」というのは、東郷平八郎¹⁹に関係があります。日露戦争の日本海海戦のときに、戦艦三笠に吊されていた鐘を鳴らして、平八郎自身が「皇国の興廃この一戦にあり」という言葉を述べた。その「興国之鐘」が、後に下賜されて六中にありました。ここから校名の「興国」を取ったんです。鐘は残念ながら戦後に無くなってしまいましたがね。荒木貞夫²⁰大将から頂いた日本刀などもありました。これはどこかに保存してあると思いますけれど。

当時は毎年、正月になりますと、「興国之鐘」の縁で、校長が全生徒を連れて、平八郎さんのお宅に伺い、ご挨拶をして、お話を伺うということをやっていましたね。余談ですが、平八郎さんのお孫さんを代ゼミ (代々木ゼミナール) で教えたことがありました。そんなこととは知らず、普通の書物には書いていない日本海海戦時の事情を述べたわけです。講義が終わると、講師室に一人の青年がやってきて「先生、ありがとうございました」という。「なんだね」というと、「私どもの知らないことを話して頂いて、改めて感謝いたします」と言われたことがありました。

また、当時、全校生徒が 4 月 8 日にお釈迦様に甘茶をかけるなんてこともやりました。公立学校でそんな宗教行事 (灌仏会) をするなんて、今では考えられないでしょう。

一 府立中学校に就職されるときに、今であれば教員採用試験がありますが、当時はどうでしたか。

私は引き抜かれたんですよ。まあ、私の知らないところで話が回っていたのかもしれませんがね。当時、田中啓爾さんが東京の視学²¹をされていました。田中さんは、あちこち歩かれて「こういう青年がいるんだよ」と言い、「はい、分かりました」ということ

¹⁷ 豊南商業学校：現在の豊南高等学校 (東京都豊島区)

¹⁸ 1922 年に開校した東京府立第六中学校は、1943 年の都制施行により東京都立第六中学校と改称し、1948 年の新制高校発足により東京都立第六高等学校となり、1950 年に東京都立新宿高等学校と改称して現在に至る (東京都新宿区)。夜間部は 1924 年に開校し、1941 年に東京府立興国中学校と改称され、1943 年の東京都立第六中学校第二部などを経て、その後、東京都立新宿高等学校定時制課程となった (2010 年、閉課)。

¹⁹ 東郷平八郎：1848～1934 年、海軍軍人。日露戦争時の連合艦隊司令長官として知られる。

²⁰ 荒木貞夫：1877～1966 年、陸軍軍人。陸相や文相も務めた。

²¹ 文部省および地方に置かれて、強い権限を持った教育行政官であった。

になる可能性は十分あったと思うんですよ。

— 武井先生から希望されたわけではないのですか。

私は特別に、どうということはありませんでした。良い学校だから、行ければいいなとは思いましたが。私が考えるよりも先に、田中啓爾さんから「武井君、君は六中に席ができたからね」なんて言われました。

— 先ほど、召集されてというお話を伺いましたが、大学の学生からと同時に、中学校の教諭からも出征されたことになるのでしょうか。

そうですね。

— 履歴には、昭和 18 (1943) 年 12 月に「第六中学校教諭を拝命」と書かれていますが、これは夜間部から昼間部に移られたということでしょうか。また、この当時に担当されていた教科目は歴史だったのでしょうか。

いや、異動ではなく、兼務です。後に新宿高校になってからも、兼務で昼も夜も授業をしていました。教頭は別々におりましたけれど、校長も兼務でした。

担当していたのは、もちろん歴史です。色々やらされましたね。西洋史も、東洋史も。日本史もやったことがあるんですよ。ただ、日本史は、東洋史や西洋史に比べれば少なかったです。日本史は教える年もあれば、教えない年もありました。

— 東洋史と西洋史とでは、担当の先生は分かれるものなのですか。

大体、分かれて授業を持つのが普通じゃなかったですかね。担当者は、何人かおりましたけれどね。だけど、そうは言いますが、旧制中学の場合、教えるクラスによりましては、けっこう東洋史・西洋史の両方ともを担当していたのではないのでしょうかね。そういうふうに思いますけれど。

— 戦争中の中等学校用の国定外国史教科書（『中等歴史—²²』）を持って参りましたが、当時、これをお使いになりましたか。

どうだろう。違いますね。

— 東洋史ですと、有高巖著でしょうか。

²² 文部省『中等歴史一』中等学校教科書株式会社、1944年5月。

そうそう、有高巖さんの教科書でした²³。日本史は、誰のであったか、忘れまして。

- 一 戦争中、中学校の授業は普通に行われていたのですか。そのころの授業というのはどんな感じのことをなさっていたのでしょうか。また、授業内容について、こういうことを教えてはいけないとか、教えなければならぬというような戦争中の制約はありましたか。

昼間部の諸君は、かわいそうに、例の勤労働員²⁴がありました。昼と夜の両方を兼ねておりましたため、夜間部の諸君がおりますので、私は付いて行けませんでした。

授業は、一般的には、どなたもご存じの教科書に沿って講義をするものでした。古いことなので詳しくは記憶しておりませんが。

また、授業への制約はあったのですけれども、私らはあまりそういうことに拘らないんですよ。ただ、今とは、歴史が違いますよね。教科書そのものがね。要するに、皇国史観に基づく歴史でした。その中には神話も入っておりますしね。だからといって、私は教科書通り教えることはしません。ずっと今日までそうですけれども、歴史的な見方というようなものを主にしましてね。とにかく学校、生徒さんが大変に優秀ですから、教科書に書いてあるような堅いことは、つまらないことと考えておりましたから。むしろ歴史の背景を質問する子が多かったですね。たとえば『日本書紀』にしても『古事記』にしても、その中に例を取りまして、その背景にあるものを話して欲しいという、非常に質の高い子たちでした。

- 一 立正大学の高等師範部や文学部史学科で勉強しながら、正規の教員になるというのは、当時、よくあることだったのでしょうか。その後の都立高校では、簡単には許されないと思いますけれども。

当時はありました。今は、許されないだろうね。ただ、私が六中から大学に参るときだって、校長からの特別な許可をもらいました。「教える時間を費やすことは致しませんけれども、その間は、大学にいて自分の求めたい研究をいたします」ということので了解を得ました。戦後になってからは、教育委員会がうるさくなりました。

- 一 戦争中のことで、もう一つ質問させて下さい。例の玉音放送（1945年8月15日）のときは、どうされておりましたか。

それは、もちろん六中にいました。私は、六中・新宿高に36年——でしたかね——も

²³ 中等諸学校で五種選定が実施された1941年度における有高巖執筆の中学校用東洋史教科書は、『最新中等東洋史 中学校用』（東京開成館発行、1939年9月10日修正3版発行、1939年9月18日検定）である。

²⁴ 学徒勤労働員：戦争中の労働力不足を補うため、中等学校以上の学校の学生・生徒は、軍需産業などに動員された。

いたんですから。あのときは、皇居の前まで生徒たちと参りましてね。本当に、感無量な思いをしました。

新宿高校は良い学校でしたよ。よく勉強する、良い資質の子ばかりでした。東大合格者数が、今どきは灘高校とかが騒がれていますが、灘どころじゃない。東大以外には受けないという子も多くいました。

4. 予備校での授業

— (茨木) 高校時代の友人が、代々木ゼミナールで武井先生の世界史の授業を受けて非常に分かりやすく面白いと話していたのをよく覚えています。いつ頃から代々木ゼミナールで授業を持たれていたのでしょうか。

たしか、昭和32(1957)年に、代ゼミ²⁵の理事長をはじめ7~8人が会いに来て、新宿高校の校長室で引き拔きの交渉が始まったんです。あんなことは普通あることじゃないですよ。「皆さんの面子もありましょうから、顔だけ出します」ということで、代ゼミの講師を兼任しましてね。平成8(1996)年までやりました。

昭和41(1966)年になりますと、後に新宿セミナーの理事長になるかたが、「学校をつくってほしい」ということでしたので、「しょうがない。力を貸しましょう」ということになり、新宿セミナー(東京都新宿区)を設立いたしました。当然、そこでの講義もごさいます。新宿高校と兼任、代ゼミと兼任です。そこの参与を平成3(1991)年までやりました。

— 武井先生は、都立高校と予備校を兼務されていましたが、そういうことは、よくあったのですか。

少なかったですね。後になりまして、新聞記者が付け回したりしましてね。それで問題にされてやめた教師もだいぶいました。教育長をお勤めになられたかたから、後から間接的に聞いたんですが、都で問題になって、「それ以上、問題にすると、先生がやめるぞ。良い教師はみんな呼ばれているのだから、やめたら学校がガタガタになるぞ」という論議があり、私の名前も出たけれども、そのままになったんだという話でした。

— 当時は名前を変えて、予備校で講師をされた先生もいらしたそうですが。

新宿高校には、いませんでしたけれども、他の高校には、いたようですよ。

— 予備校では、人気があっても力もないと、すぐに、だめになると聞いています。以前

²⁵ 代々木ゼミナール：学校法人高宮学園代々木ゼミナール(東京都渋谷区など)。

に、代ゼミで二十数年間（当時）ずっと講師をされているのは、武井先生ともうお一方と伺いました。予備校の苦労というようなことがありましたら、お話しください。

別に苦労ではなくして、楽しくてしようがなかったです。なぜかという、反応がすぐ現れるからです。その代わり、悪い反応が現れると命取りになりますけれど。それは厳しいですよ。だめとなったら、いつスパッと首が飛ぶか分かりません。私の場合はどこへ行っても、入りきれない生徒さんをお断りするような状況でしたからねえ。

困ったこともありました。北海道へ行くときは飛行機で行くでしょう。他は新幹線で行きます。曜日を間違えましてね。うっかりして、飛行機に乗らなければならないのに、新幹線に乗る寸前で気づきましてね。羽田空港にとんでいって、かろうじて飛行機に乗ったことがありました。

5. 都歴研・全歴研

— 戦後になってからの新宿高校でのことをお聞かせ下さい。

戦争が終わりまして、戦後になると組合ができました。

— 労働組合ですか。

そうです、労働組合。ようするに教員組合ですね。当時の労働組合は、威勢よく、強いことを言っていました。共産党の岩間正男²⁶をはじめとする教員の労働組合があったのですが、私たちは「学校の教師だろう。だから教員組合というものは、単なる労働組合とはちがうぞ」ということから、自主的な立場の仲間たちといっしょに教全連²⁷（教員組合全国同盟）という全国の教員組織にいたしました。

そういえば、佐野学²⁸さんがそのころ早稲田大学商学部の教授でして、私の友人の親戚関係もあったからでしょうか、私を呼びにきまして、文京区のお宅でお目にかかったことがございました。でも、そのとき、先生は蚊帳の中に入っていて、話をなさる。せっかく人を介して呼びながら、ご無礼だろうということで、私はおいとまして帰りました。でも、それがご縁となり、佐野さんが亡くなるときには私をお呼びになって挨拶いたしました。あのころの『教育新聞』では、何か月にもわたる論争をしたこともございました。

私は、組合の青年部長・文化部長などを引き受けなきゃならないはめになりましてね。そのときに東京都と交渉しました。「教師が組合かぶればっかりではだめだよ。むしろ

²⁶ 岩間正男：1905～1985年、教員組合の運動の後に参議院議員。

²⁷ 教全連（教員組合全国同盟）：1946年、結成。1947年に教全連はその他の組織とともに日本教職員組合を組織した。

²⁸ 佐野学：1892～1953年、社会運動家・歴史学者。

教育長自身が積極的に援助なさらないと教師が傾くよ」ということから、歴史に限らず、すべての教科に研究資金を出させたんですよ。それがもって、歴史の研究会、国語の研究会、英語の研究会などができたんです。そんなことで、歴史のほうも、「都歴研」（東京都歴史教育研究会）を創設したんです。そして、昭和 35（1960）年に都歴研を母体としまして、「全歴研」（全国歴史教育研究協議会）を創設したんです。

戦いに敗れまして、歴史は中止になったでしょう。歴史の教科は講義してはならなくなった。歴史がなくなっちゃったんですから。

— 昭和 20（1945）年 12 月 31 日の「修身・日本歴史・地理停止²⁹」ですね。

そうです。しばらくたって、復活することになるんですが、その復活に際して、これといったひな型もなければ、方法論も提示されない。そこで、全国の歴史と地理の教師は戸惑ったわけです。東洋史・西洋史・日本史を、今までのように教えてはならない。それでいて、歴史教育を始めよというわけです。大変な戸惑いを感じたのです。その他の教科もそうだったでしょうけれども、方程式を教える数学などには大きな影響はなかったでしょう。歴史・地理については、非常に厳重なストップをかけておりました。そのなかで復活することが決まったんですが、「それでは、どういう仕方をするの」というと、今までの方式ではいけない、しかも、新しい方式は定められていない。だから、現職の教員がすごく困ったんですよ。世界史も、いわゆる東洋史・西洋史の枠ではない世界史を構想せよ、ということが教師たちの命題でした。

そういう状況の中で、都歴研を母体といたしまして、全歴研が発足したんです。どの都道府県でも、皆がどう教えたらよいか分からない。今までのでは、いけない。指針も示されない。皆それぞれにどうしたら良いかという工夫が必要なわけですよ。全国の教師が悩みましたね。ですから、私の知っているだけでも、愛媛や大阪だとか、それから東北だとか、それぞれ個性的な教師が、自分の考え方や歴史構想を発表しました。実は、私がいました新宿高校の校長が中心で、そこで方法を協議したんです。亡くなりましたけど、校長は成田喜英³⁰さんという大変に立派な方でした。全歴研の全国大会（第 5 回・1964 年東京大会）のときには、ライシャワー³¹を呼んで講演してもらったりもしました。そのときに、できました全歴研の紀要の第一集がこれです³²。

6. 「世界史の体系」の模索

— 今、伺った戦後の戸惑いの中から、武井先生の世界史への取り組みが始まると存じ

²⁹ 占領軍による 1945 年 12 月 31 日「修身、日本歴史及び地理停止ニ関スル件」の指令。

³⁰ 成田喜英：1906～1985 年、西洋史専攻。

³¹ エドウィン・O・ライシャワー：1910～1990 年、歴史学者・駐日米国大使。

³² 『全歴研紀要』第一集、全国歴史教育研究協議会（事務局、東京都立新宿高校内）、1965 年 3 月。「巻頭言」は「会長 成田喜英」、他に、E. O. ライシャワー「日本の歴史の特異性」、武井正教「甲・駿地方史蹟研究」等が掲載されている。

ますが、その間の経緯をお聞かせ下さい。

世界史は、今までの東洋史・西洋史ではいけない。新しい方式を生み出さなければいけないのですけれども、出てこないんですよ。それぞれ教師たちが悩んでやったはずなんです。しかし、これでよいという一つの結論がなかなか出ないんですよ。その場になりまして教科書は出ましたけれども、教科書の世界史は、〈いわゆる世界史〉に過ぎませんよね。私の「世界史の体系」が始まりましたのは、その苦悩の中からでした。東洋史でもなければ、西洋史でもない。全世界を一望にかけて、発展段階をもって世界史を組み立てる方式は、そこから始まったんですよ。完成いたしましたのは、かなり前です。

昨年（2006年）に刊行しました書³³は、そのときに完成したものを元としております。今回は日本について言えば、安倍晋三内閣のできるまで（2006年9月）を入れております。

この「世界史の体系」は大変、受けに受けまして、新宿高校でも、代ゼミでも、新宿セミナーでもそうで、この講義を聴きたいばかりに集まってくるわけですよ。代ゼミの場合には、普通ですと若い青年の浪人生だと思えます。けれども、私の講義の場合には、それこそ大学を出た社会人や学校の教師などもおりました。多くは代々木の本校で講義をしていたんですが、その後、引っ張り出されて、北は札幌から、南は九州まで行きました。ですから毎日、大変でした。時によっては飛行機、時によっては新幹線、すぐに帰って来られませんから、宿へ一泊しました。

その方法論は、自分で言うのも何ですけれども、非常に多くの影響を与えましたよ。先ほど申しましたように、予備校では、若い青年だけじゃない、土曜日になりますと、高等学校の教師もずいぶん入っていましたね。それから大学へ進んでいるにもかかわらず、新しい方法を聴きたくて来られる人たちもいました。日本中どこへ行きますとも満員で、生徒さんをお断りするような状況でした。そのくらい、皆が新しい方法に注目していたし、その効果を期待していたんだろうと思いますね。

— 少し話を戻しますけれども、戦後に、武井先生が世界史の構想をつくるに至るまでの苦闘や、どのような矛盾に直面したか、というような話をお願いします。

どうだったかな。世界史ですけれども、かつての東洋史と西洋史をくっつけて、世界史とするのではない。工夫をせねばならない。とは言っても大部分の教師は、やっぱり東洋史と西洋史をくっつけて教えていましたね。

— 多くの先生がたは、やはり東洋史と西洋史で行かざるを得なかったということですか。

そうなんです。

³³ 武井正教『新編集 武井の体系世界史—構造的な理解へのアプローチ—』栄光、2006年12月。

— 東洋史のところだけ、西洋史のところだけという先生もいらっしゃいましたか。

どうだったかな。そうではなかったと思いますよ、私どもの経験では。

— 正式に世界史の授業が始まったのは、昭和 24 (1949) 年 4 月からで、それ以前は、東洋史・西洋史の学習指導要領や教科書がつくれ、新制高校が発足した昭和 23 (1948) 年 4 月時点でも東洋史・西洋史が継続されていたと理解しておりますけれども。

そうだったと思います。ただ、そうだけれども、東洋史・西洋史という今までの体系そのものが認められてはいなかったんですよ。要するに世界史を教えなさいということです。ところが長い間、大学をはじめとして、東洋史・西洋史でやってきたものなので、なかなか、それをぶち壊して、新しいものをつくるという発想が出てこなかった。私は、それではいけないということで始めたのです。

— そうすると、世界史という科目が正式にできる以前から世界史的なものをつくらうとされていたのですか。

私はそうですよ。要するに「西洋史と東洋史をくっつけたようなものは世界史ではないよ」というのが、そのころから以降、今日までの私の主張なんです。それでは、どういう世界史をつくるべきか、ということで、長いこと研究して悩んだりしてまいりました。その結果が私の「世界史の体系」としてできたものです。

7. 「世界史の体系」の背景

— 「世界史の体系」がつくられていく過程を、もう少しお聞かせ下さい。出版に関しては、^{ふざんぼう}富山房の編集者のかたと先生との間で話が始まったことのようにですが、その辺のことからお話ください。

私が独自の方法で教えている間に、誰かからか聞いてきましてね。〈富山房の松木老人〉と皆が言うておりましたけど、たしかに老人でした。その松木さんが聞きつけまして、「出版社でも新しい世界史をどうしていいか分からない。ですから、それを探していたんです」ということでした。「できたら富山房で是非とも出したいから、早くできるように」ということでした。老人でしたから…。私の研究は、それこそ何年も、何年もかかりましたからねえ。大綱はできて、進みましたけれど、完成しないうちに亡くなりました。

— 武井先生の「世界史の体系」の中で、非常に重要だと思うのは、地理的なものと、

時代的なものを、非常に巧みに整理されておられる。この辺の発想を生み出した思想や勉強のバックボーンあるいは信念といったことについてお話しいただけますか。

それに至るにはずいぶん色々な経験があったんですけども、一言で申しますと、世界地図がありますよね。おつむに地図があれば、それをすべて包括して、しかも一つの、東洋史・西洋史ではなくて、発展段階を見つけて——その発展段階をみつけるのが大変ですけども——、横切りにしながら、縦につながって、全世界が分かるという方法です。

その本ができる前、はじめの六中・新宿高校の場合には、つくりましたものを生徒に見せるのではなくて、黒板に世界の地図を描く。地名を全部ならべて書くわけですよ。そして時代に沿って、その関係を入れていきまして、一望の下に全世界が自分のおつむの中で組み立てられる方式です。できあがれば、ごらんになったような書物の方式ですけど、それを全部、黒板の上に板書してやったんですよ。ですから皆、いいお歳になっても、教え子たちはそのことをいつでも思い出して話をするんですよ。ああいうことって、二度とはできないことだなあと思いました。

— 今、おっしゃったような形での授業をされるようになったのは何年ごろからですか。

全歴研ができるころから工夫を始めておりました。ただし、完成した姿と申しますか、「こうでなくちゃならん」という確信を持ちましたのは、ずいぶん経ちましてからですけども。方法論そのものは変わっていませんが、肉付けしたり、裏付けをしっかりとりするのには、ずいぶんと時間がかかりました。はじめ「総合世界史」としてできて、それを「体系世界史」にしたのですから、昭和40（1965）年ぐらいには、原型はできていたはずですよ。

—（鈴木）富山房から話があった当初、武井先生は縦書きをイメージされていて、あるときから横書きにつくることに気づいた。それが非常に大きな転機だったということ、以前に伺ったことがあります。その間の経緯をお願いします。

そうなんです。はじめは縦に書いていまして、それだと行き詰まっちゃうんですよ。それで、横組みにしたのか、図表式にしたのか。ちょうど私が苦しんでいるとき、大体の構想は出来あがっていたんですけども、「今少し考えなければいけないな」というときに、たまたま吉川弘文館から世界史年表³⁴が出版されたんですよ。これはショックでした。あの年表は、私が考える構想そのものを書いているのではありませんが、いわば全世界を縦横に年表式に見ているわけですよ。私は年表をつくるつもりではないんですけど、色々やって行き詰まり、さあ、どうすべきかというときに、あれが生まれ

³⁴ 亀井高孝・三上次男・林健太郎編『標準 世界史年表』、吉川弘文館、1962年3月、第1版第1刷発行。

て、ショックでしたね。家内に、「すまんけど、1か年間、365日を越えることはないが、その間、ちょっと色々考えなくちゃならんから、毎日お酒をいただくけど良いか」と聞いた。「いいですよ」という。それから学校が終わりますと、今は無くなりました新宿の笹一という酒場に行き、座って——私の席は決まっておりました——、お店を閉めるまで飲んでるわけです。ですから、毎日、10本から12本くらい飲んだかな。店員がタクシーを拾ってくれて、それで家に帰りました。

— そのときのお住まいは、こちら（国立市）でしたか。

新宿の下落合でした。酒が好きで飲んでるわけではない。元来、私は、あまり酒は好きではないんですよ。だけど、今までのもやもやしたものをいっぺん取っ払いたい。先ほど話しました吉川弘文館から出ました年表に対して、「私ののは、年表じゃないよ」と。だけど方法論として、あの縦横方式は、もっと有効に使えるはずだ、と。新しい構想を、まったく新しい構想をひねり出す。その1か年でしたね。こうしてちょうど365日が済み、「明日からはちゃんと帰るから」と。その間には、自分の構想が全部できていました。そのころです。先ほど話しました松木老人が亡くなりましたのは。

そんなことをしているうちに、私の母が、「あとどのくらいかかったら完成するのか」なんて言いながらお亡くなりになった。それから5年後に、今度は家内が、「毎日、毎日、長いことかかって、研究なさっていらっしゃるけど、あとどのくらい残っていますか」なんて聞かれて、それで他界した。ですから思いがこもっているんですよ。そんなわけで完成すると同時に、お寺さんにそれをお見せして、ご供養してもらったんです。ずいぶん長くかかりましたねえ。それでもって終わったんじゃないくて、それから、さらに研究が本格化したんですから。

—（鈴木）私が立正大学で武井先生の講義を受けていたのは、昭和54～55（1979～1980）年ごろですけども、そのころ先生は「そろそろ高校のほうは定年だ。定年になるころになって、ようやく分かってきたんだがなあ。おいしいことだなあ」とおっしゃっていました。そのことを非常に強く記憶しております。

そうかもしれないねえ。

— 武井先生は、そのお忙しい合間に、日本史の年表³⁵も作られていますが、できあがる経緯をお話ください。

日本史の年表など、私ははじめから作るつもりではなかったんですよ。帝国書院は教科書を出してしまっただけで、副教材として年表がどうしても必要になります。教科書を発行していますと売れるんですよ。名前を言っちゃ悪いけど、早稲田大の教授が、はじめ

³⁵ 武井正教・澤田健司・野口和子編著、竹内理三監修『高等新日本史年表 三訂版』帝国書院、1971年。

に帝国書院から頼まれて作ったんです。それが吉川弘文館の年表と大変よく似ていて、訴えられたのです。それで吉川弘文館の立ち会いの下に、版を焼却して、帝国書院は面子がつぶれたことがありました。そのときに帝国書院の社長が、私の学校に来まして、「武井さん、忙しいだろうけれども、年表を作ってくれないか」と。それで「お宅にあったはずじゃありませんか」というと、実はこれこれ、というわけで、こういう恥をかけたんだというのです。それで、しょうがないから私が作ったんですよ。

— 武井先生の「世界史の体系」には地理的な要素が基盤にあると思いますが、立正大学にいらした地理学の田中啓爾先生の影響はあったのでしょうか。

ありますね。田中先生は、私の知識やものの考え方の根本に、大きく影響していると思いますね。直接、そのことを教えてはくれなかったけれども、私の「体系世界史」の中に、地理的構想が基本にあるのは、そのためだと思います。田中先生は、立派な先生でしたよ。お留守を務めさせて頂いたり、色々とかわいがって下さいました。

— 武井先生が世界史構想なり、日本史構想なりをつくるにあたっては、地理的な素養の他に、もう一つには、哲学的に深い部分があると思いますが、いかがでしょうか。

何と言いますかねえ。私は物事を深く考えるほうですから、知識を受け売りして、そのまま教えたり、考えたりすることは、あまりしません。自分で確かめる。考える。ですから、先ほどお話しした卒業論文でも、一つの言葉にしても、歴史にしても、たとえば日本人のものの考え方なんかは、『歴代詔勅集³⁶』の中から、文字や言葉の研究をして、あらゆる角度から追求して、結論を出すということをしました。ですから、辻善之助さんが大変にその方面を評価して私を見てくれておりましたね。

また、私はものを考えるときに、断片で考えたり、結果論で考えたりするのではなく、〈考え方の考え〉から考える、というやり方です。いつからこんな考えをもったかは知りませんが、そういうところがありましてね。範囲は非常に広くなりますし、深くも考えますし。だから能率のなかなか上がらないところもあるんですよ。

— 身延にいらしたお父様は僧籍をお持ちで、武井先生ご自身も僧籍におありと伺いました。そのため、その辺の深い研究をされてきているのかなと思うのですが、お父様の影響はいかがですか。

父の影響は、多少ながらは、あるかもしれませんね。質問される。うかつに常識で答える。「どうしてそうなるんだ」という質問が返ってくる。そうすると、考えなくちゃならない。背景から論理的に考える。それには〈考え方の考え〉から正していかなければならない。

³⁶ 辻善之助監修、森末義彰・岡山泰三編『歴代詔勅集』目黒書店、1938年。

8. 現在のテーマ

— 今、テーマにされていることをお聞かせ下さい。

それは、色々あります。まず、一つは日本人のものの考え方・ものの見方、あるいは合理化・美化といったものは、ヨーロッパとは、はるかに異なり、日本特有のものがごございます。そのことを、案外、みんな知らない。それで平気であるわけです。これは明らかにするべきだなと考えています。

たとえば、神というものを考えましても、ヨーロッパでの、いわゆる「ゴッド」と、アイヌの「カムイ」と、日本の「神（かみ）」とは、本質が違う。認識が違うんですよ。認識論のタイプといいますか、型といいますか、考え方といいますか。それを明らかにしたいなと思っています。私の影響を受けて、代ゼミを出て、国学院大学を出て、神奈川県で神主になった人がいる。「どうして神主になったのか」と聞いたら、「先生の影響ですよ」と言われました。

最近の研究法を見ていると、ヨーロッパの論理や認識論で、日本の神道を研究しようとしている。それは、無理だよ、本質が違うんだから。でも、何とか道を拓いてあげたいと思っているんです。やらなければならない課題はいっぱいあります。ただ、とても体がついて行かない。

— お伺いしたところでは、世界史の授業を、おそらく日本で一番長く、しかも一番多くの方々にされたのは、武井先生ではないかと思いますが。

まあ、そうでしょうね。年賀状だけでも毎年1000枚を欠くことはないですよ。

— 本日は武井先生の貴重なご体験を伺うことができました。長い時間、どうもありがとうございました。

後記

「はじめに」で述べたように、このインタビュー記録は、ご本人の確認を得られていない。可能な限り慎重を期してまとめたが、思わぬミスがないことを願うばかりである。戦争中の体験、戦争中からの長い教員生活の様子、特に世界史の体系への飽くなき追究の過程は、大変に興味深い内容であった。

最後に、武井先生のご冥福をお祈り申し上げますとともに、刊行をお許し下さった武井先生のご家族に心から御礼を申し上げます。

(文責：茨木智志)